

シリーズ 草地更新を考える最終回

播種後はギシギシ対策を徹底する

I. 播種後はギシギシ対策を徹底する

ギシギシは1個体の種子の生産量が1万粒になり、発芽率は土壌中では20年経っても80%以上、糞中においても約5%が発芽することがわかっております。また、根室普及センターの調査結果から堆肥、スラリー中においても70~80%が発芽することが分かります。従って更新時に親株を除草剤で処理しても、土壌中には多量の種子が眠っており、更新時に一斉に発芽する可能性があります。

写真1はギシギシが優占した夏播種草地の2年目(平成元年)2番草(8月)の写真です。この当時は夏播草地へ利用できる除草剤が無く、越年して春散布では牧草が抑制されることから、結局、1年間何もしなかったためにこのように、ギシギシが優占してしまいました。

昨年、夏播草地へ利用可能な除草剤ハーモニーが道の防除基準に登録され、ギシギシ処理の選択幅が広がりました。散布時期は牧草が定着し、ギシギシの草丈が20cm以下、散布量は10a当たり0.5~1.0g、水量100ℓです。薬量を誤って多くしますと牧草が生育抑制されますので注意して下さい。また、アルファルファ以外のマメ科牧草は薬害が著しいために越冬できない時がありますので注意が必要です。

ギシギシは小さいうちに退治することが重要です。写真1のようになってしまうとギシギシが枯死した跡



写真1. 夏播草地の翌年8月のギシギシが優占している状況

が裸地になり、土壌中のギシギシがまた発芽してきます。このようなときには専用播種機(ブレド、ハーバーマットが良い)を用いて追播すると良いでしょう。

写真2は芽室町において除草剤処理によって発生した裸地へ、8月28日に2番草収穫後の9月6日にチモシーを追播した直後の状況です。写真3は翌年の5月31日ですが、裸地にチモシーが定着しているのが分かります。

この追播技術はアルファルファ混播草地においてイネ科牧草がなくなったときにも利用できます。写真4は美深町においてアルファルファが優占してイネ科が無くなった状態です。このような草地は平成22年のように夏が暑いときに良く見受けられる状況です。3番



写真2. 9月6日追播時の状況(冠部被度で裸地が40~50%)



写真3. 翌年5月31日の状況(裸地にチモシーが定着している)



写真4. 3番草収穫後の9月15日にオーチャードグラスを追播



写真5. 翌年、10月12日の状況：オーチャードグラスが定着

草収穫後の9月15日にオーチャードを追播しました。

写真5は一年後の10月12日の定着した状況です。オーチャードはチモシーよりも早魃に強く根張りも良好なことから定着する可能性が高く、また、簡易更新によっても定着する確率が高く、今後見直すべき草種のひとつです。

II. 除草剤を利用した簡易更新を成功させるためのポイント

雪印では平成16年から簡易更新の現地試作を開始しておりますが、はじめは失敗の連続でした。その経過を紹介して、成功させるポイントを考えたいと思います。

1回目は、酪農家さんが時間に余裕がある時期に播種できればよいであろうとの考えから、春の追肥が終了する5月下旬頃に播種することを想定して、除草剤を平成16年5月27日に散布しました。草丈は30cm程度まで生育しており十分な生育でした。翌日28日にシードマチックで播種しましたが伸びた草が邪魔になりま



写真6. シバムギが再生し増加している（平成16年7月8日撮影）



写真7. バムギが完全に枯死してから播種（平成16年7月24日撮影）

した。播種後は適度に雨が降りチモシーの発芽が確認されましたが、チモシーの定着は少なく、シバムギが増えた草地になりました（写真6）。

2回目は1番草を収穫した後にシバムギを再生させてから除草剤を散布して、シードマチックで7月24日に播種しました。1回目の反省から除草剤を散布し完全に枯死してから写真7のようにシードマチックで播種しました。しかし、この時期は雨が少なく牧草の発芽は確認できましたが定着割合が少なく、シバムギが多い草地になってしまいました。

3回目は1回目草地へ除草剤を散布して8月23日に再度播種しました。10月23日にはチモシーは定着して更新前のシバムギ優占草地からチモシー優占草地へ変換できました（写真8）。

1年間の試作から、5月下旬から7月下旬までの降水量が期待できない時期の簡易更新は発芽はするが定着が難しく、8月下旬の気温も下がり降水量が期待さ

